

認知症予備群運転者の増加と道路交通のあり方

高齢者運転者の安全確保のための道路交通の課題

神戸 信人

株式会社オリエンタルコンサルタンツ

【目的】

我が国は、平成 18 年に高齢化率が約 20%となり、国際的にも高水準の高齢社会となり、今後もさらに進展することは言うを待たない。また、このことに伴う高齢ドライバーの増加による交通事故も増加が著しい傾向となっている。高齢ドライバーの中には、認知症予備群と思える運転者も存在し、近年、高速道路の逆走事故や車線誤認などの危険な運転実態が明らかになって来ている。

しかしながら、高齢者や認知症予備群運転者の安全性を確保する抜本的な対策は確立されていないのが現状であり、今後、高齢者や認知症予備群の視点を取り入れた安全対策を検討していくことが必要となる。

以上のことを踏まえ、高齢者や認知症予備群運転者の運転特性を把握し、道路交通における課題を探るとともに、高齢者や認知症予備群運転者の視点を取り入れた道路交通のあり方について考察する。

【方法】

自動車運転教習所等と連携し、高齢者や認知症予備群運転者の視機能特性や認知機能特性を把握し、運転行動にどのような影響を及ぼすかを明らかにすることで、現在の道路交通における課題を洗い出し、高齢者や認知症予備群運転者の安全を確保できる道路交通のあり方について考察する。

【倫理的配慮】

実験箇所の名称や被験者の氏名が明らかにならないように配慮するとともに、実験データの公表についての参加者の了解を得たうえでの実験とする。

【結果】

高齢者の運転特性を把握するために、都市部と地方部の高齢運転者のモニターを対象とした視機能診断及び認知機能テストを実施。診断テストでは、視野の広さと反応、速度予測と判断力、動体視力、距離感覚、目の動きの 5 つの観点から診断し、診断結果を年齢層別に比較して高齢ドライバーの運転特性を把握する。

診断テストの結果から、高齢運転者の運転特性は、若いドライバーに比べ①視野が狭く、判断に必要な情報の取得量が少なく、迫ってくる危険に気付きにくい、②前後左右の車を見て判断する余裕なくなる、③目標に近づかないと正確に見えないため、判断が遅れる、④ブレーキやハンドル操作の反応時間が遅い等である。

【考察】

高齢者の運転特性を踏まえ、高齢運転者による交通事故が多発する交差点等において、事故発生要因を分析し、事故対策の方向性を検討。

高齢運転者の安全確保のために、道路交通に関するインフラ整備において、今後留意すべきことが明らかになってきた。

車の急減速などの交通状況の急な変化を減少・防止するとともに、接近する車の判断能力の低下を補うため、信号の変わり目の時間に余裕を確保し、高齢ドライバーのブレーキやハンドル操作の反応遅れをカバーすることや、交差点内等において、対向から接近する車の速度と位置を判断しやすくし、高齢運転者の誤判断や見落としをカバーすること等、交通インフラ・車両・管制の検討課題が浮かび上がった。